

【礼拝説教】 二〇一五年三月八日

初代の教会 — 104

主の御心が行われますように

使徒言行録 二十一章 七〜十六節
ローマの信徒への手紙 十五章 三十〜三十三節

武田 真治

一、預言する女性たちの存在

それまでのユダヤ教とキリスト教が大きく変わったと言われていることが女性の役割でありました。女性の存在というものがとても重要になりました。そのことが今日の箇所にもよく見て取れます。即ち「翌日そこをたつてカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教師フィリポの家に行き、そこに泊まった。この人には預言をする四人の未婚の娘がいた。」です。

フィリポという人は、ギリシア語を話すユダヤ人たちに對して牧会や説教をするようにエルサレム教会で選ばれた七人の一人です。彼の仲間がステファノでした。彼の家には「四人の女性の預言をする娘たち」がいたという点です。ここでの預言とは、神様から言葉を預かって語ることであり、今でいう伝道者のことです。当時の教会にはもうすでに女性の伝道者がいたということであり、フィリポから引き継いでカイサリア教会を牧会していたと考えられます。

これまでのユダヤ教は、神殿の礼拝やシナゴグという

会堂での礼拝であつても、男性しか出席できませんでした。女性は建物の周りの庭や外に居て、中から聞こえてくる歌や旧約聖書朗読、礼拝の様子を見ているだけでした。キリスト教になり、男も女もなく全員が礼拝に集うようになりました。なぜそういう変化が起こったのかと言えば、もちろんイエス様ご自身が男女の分け隔てをなさらなかったことやお弟子さん達の中にもマグダラのマリアさんとかマルタさんとか重要な働きをした女性たちがいたこと、そしてイエス様が復活された朝、そのキリストと最初に出会ったのは女性たちであつたということと、もっとも大きな影響力を持ったのは「洗礼」でした。

「ガラテヤの信徒への手紙」三章二十七節には「洗礼を受けてキリストと結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」とあります。それまでのユダヤ教では、男性だけが受ける（割礼）神の民のしるしでした。それがキリスト教になり「洗礼」へと変わり、民族や社会的身分や男女の壁も越えて誰でも受けられるものでした。ここから教会の中で女性たちが生き生きと働きを為して行くようになるのです。

二、カイサリアでのパウロの滞在

この彼女たちが牧会しているカイサリア教会にパウロ

は「幾日か滞在していた」と報告されています。先を急ぐ旅であったのに敢えてここで数日を費やした理由は、教会からの歓迎を受けたからでしょうし、パウロもこの女性伝道者達のために力を貸してあげようと思ったかもしれない。ただ、それだけの理由だったのでしょうか？

実はそこにアガボという預言する者（この場合の預言は予言）が下って来て、「パウロの帯を取り、それに自分の手足を縛って言った。『聖霊がこうお告げになっっている。へエルサレムでユダヤ人は異邦人の手足を縛って異邦人の手に引き渡す。』」
と言い出し、それを聞いてパウロの周りにいた者たち全員が、口を揃え、行かないで留まって下さいと懇願し始めたのでした。

それに対してパウロは「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」（十三節）と答えています。この言葉にあるように、この時、彼の頭の中にはイエス様のことがあったと言い得ます。かつてイエス様は、エルサレムに於いてユダヤ人の裁きに会い、異邦人のローマ総督ピラトに引き渡され、十字架につけられました。しかも苦難が待っていると分かっているにもエルサレムへの道を進んで行かれました。パウロはそのイエス様に倣ってエルサレムへ行くと、そこで死ぬことも覚悟してい

るのだと。そこまで言われた以上、パウロの同行者たちもカイサリアの教会員たちも、もう説得することは無理だと判断し、『主の御心が行われますように』と言って、口をつぐんだのでした。

三、パウロのゲッセマネ

どうでしょう。実はこの十四節の彼らの言葉「主の御心が行われますように」という言葉はどこかでお聞きになったことがあるのではないのでしょうか？ それは「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いはなく、御心のままに行ってください。」と祈られたイエス様の「ゲッセマネの祈り」です。

このことから解説者の中には、このカイサリアでの数日間パウロにとつて「ゲッセマネ」ではなかったかと述べています。なるほどと思います。イエス様は、ゲッセマネの園で祈られてから、エルサレムに入って行かれました。同じように、パウロもエルサレムを前にして、周りの皆が引き留めるけれど、キリストの名のために自分はエルサレムに向かうと、主と同じように私は進まなければならぬと改めて決心した「ゲッセマネ」であったのではないかと。パウロ自身も十三節で「私の心をくじいたり」と言っています。本当に心が折れそうだと、人間的な思いではそうだと。決して何の迷いも苦悶もなく、主に従う、御心のままにといいことではなかったのです。このカイサリアでの「幾日か滞在」は彼が様々に思い悩み、祈った日々であり、

まさに彼にとつてのゲッセマネだと。その結果として改めて決意を固めて行ったのではないのでしょうか。

四、誰かのための「御心のままに」

「御心のままに」という祈りの言葉は簡単に言える言葉ではありません。簡単にそう祈る時はそれほど切迫した状況では実はないのではないか、信心深そうな言葉だけの祈りの言葉にしていけないでしょうか？

ただ、今日の箇所ですら最後に目を留めたいことは、その「主の御心になりますように」と言ったのは実はパウロではなく、パウロの周りの人であったという点です。

私達は案外、自分のことなら「御心のままに」と祈ることとは多いように思います。「神様、御心を示して下さいませんか」とも言うでしょう。「御心が行われますように」と祈ることがあるだろうかということを考えさせられます。例えば、自分の子供、家族や友人に対して「御心が行われますように」と祈るのでしょうか？ もし、そう祈って子供が大変な目に出会ったら、不幸になったらどうするのだ、大変だと考えます。

むしろ、逆ではないかと私は思います。私たちの連れ合い、夫や妻、あるいは親や子どもに対して、「御心のままに」と言うことは少なく、逆に「なんとか私の思うようにあの人を変えてくれませんか」とか「なぜ、あの人はああなのでしょう。せめて、もつと優しい人に変えてください」とか。それが私達の本音ではないか。自分のことは御心のままに

と祈ることが出来たとしても、「あの息子を何とかしてください、あの娘の心を変えてください」と祈ってしまう。

この時は、パウロにとつてもゲッセマネでしたが、周りの人にとつても実はゲッセマネでした。パウロさんのことが心配だ、エルサレムに行ったら大変なことになるけれど、もう神様にお任せしようと。そうして彼らは「主の御心が行われますように」と言って「口をつぐんだ」のでした。

この最後の言葉も重要です。つまり「御心のままに」と思い定めた者は「口をつぐむ」のです。神様にお任せしたということは口を出さないということではないでしょうか。ゲッセマネを通り抜けた者は、もはや口を出さない者となるということです。厳しいことでもあります。しかし「御心のままに」と神様にお任せした相手に対してはもう口をつぐむのです。もう言わない、その子ども、連れ合い、親に対しても。それが「御心のままに」ではないかと。

それ故、ゲッセマネを経験しないと私達もこの「御心のままに」という言葉は言えないものではないかと思えます。様々な心くじける、心が折れる体験を経て、初めて「御心のままに」と祈れる、イエス様でさえも血の汗を流して祈られたのがゲッセマネであったのですから。そして、そこから十字架を見上げる者、自分自身に備えられた十字架を背負う者へと変えられていくのです。（説教より抜粋）